

# 井戸端だより

第99号

発行日：2017.9.19

発行：くらしの学習会

秋の訪れを感じるころとなりました。皆さまはいかがお過ごしでしょうか。

日本の周辺では北朝鮮の大陸間弾道ミサイルが飛び、水爆実験が行われるといった恐ろしい状況が繰り返られています。日米韓の間にも温度差、中露とはさらに温度差が感じられ、それぞれの思惑が見え隠れします。国連もなかなか機能しません。一体どうしたら平和は維持できるのでしょうか。

さて、第99号会報をお届けします。ご一読いただき、何かを感じていただければ幸いです。

## 目次

- |                      |              |
|----------------------|--------------|
| ・ 7・9月例会報告           | .....P.1~3   |
| ・ 計報(渡部伸二氏) 愛媛新聞切りぬき | .....P.4     |
| ・ 赤い涙                | .....P.5~9   |
| ・ 予測できない人生           | .....P.9~10  |
| ・ 娘と孫                | .....P.11~12 |
| ・ 猫を飼う               | .....P.13~14 |
| ・ 京野菜のつれづれ           | .....P.15~16 |
| ・ 行ってみた台湾            | .....P.17~20 |
| ・ 雑感                 | .....P.21~24 |
| ・ お知らせ・編集後記          | .....P.25    |



7月例会報告 『井戸端だより 100号』に向けて・「ヒマラヤの青いケシ」

7月22日（土）10時からHさん宅に於いて活動メンバー4名での『井戸端だより 100号』の内容について話し合いをおこなった。

- \*内容については『井戸端だより80号記念 20周年記念号』と同様にする。
- \*愛媛県の白地図に訪れた場所を記入した物を作成する。
- \*掲載する活動の写真選びは、それぞれが手元にある写真を持ち寄り決めることになった。
- \*表紙の写真はどうするのか。東温市の四季の写真はどうかとの提案があったが、まだ時間があるので懸案事項とする。
- \*県内でまだ訪れていない上島町については、最後の一つなら訪れた方が達成感があり良いのではないかとの意見があり、10月例会で訪れることになった。情報についてはK・Kさんが上島町役場に地域の資料請求をしてくれる事になり、9月の例会までにその資料を活動メンバーに回覧をし、詳細については9月例会で決めることになった。
- \*四国でまだ訪れていない徳島県については、「大塚国際美術館」は？との提案があり、参加人数によっては4月例会のようにレンタカーを利用しようかとの意見が出た。詳細は9月例会以降に決めることになった。

午後1時頃まで話し合いは続き、川内方面にある隠れ家的な蕎麦屋さんへ昼食に出かけた。家族二人で営業しているお店は十割で国産蕎麦粉にこだわり、シンプルに蕎麦を味わうメニュー。私たちは初めての店（二度チャンスを逃していたので）だったので、二種盛りせいろを注文した。内装はすっきりとしていて洗った陶器類がさりげなく置いてあり大人なたたずまい。一枚目は鹿児島県志布志産蕎麦、麩の出汁が効いた関東風なつゆ（愛媛の蕎麦屋のつゆは関東育ちの方に言わせると甘めだと以前聞いたことがある）が美味しく感じた。二枚目は山陰地方（記憶が定かではなかったのですみません）の薄緑がかかった新蕎麦。喉越し良くアッという間に胃袋へ。どちらも美味しく食べたのだが私には志布志の方が香りが高く好みの味だった。つゆもたっぷり

ありずいぶん戻ってしまったのが残念。あの出汁で茄子など煮たら美味しいかも？などと思いながら店を出ると「本日の蕎麦は売り切れました。」との貼紙があり私たちがこの日最後の客だったようだ。

この後、Hさんも余裕の時間が取れるそうなので午前中話に出た表紙に使う夏の写真（有志の方が風穴の冷たい風を利用して大切に育てている「ヒマラヤの青いケシ＝メコノフシス・ベトニキフォリア」がまだ咲いているかも）を撮りに「上林森林公園」へ。途中にある「上林水の元そうめん流し」には夏休みに入り土曜日とあって家族連れがたくさん訪れている様子を横目に目的地へ車を走らせる。皿ヶ峰の登山口とあって登山姿の人達も結構いたが、やはり風穴の冷たい風を楽しむ人が多かった気がする。車を降り風穴の方へ歩を進めると急に何処からともなく冷気が流れてきて心地好い。足元の草刈りもきちんとされていて普通の靴でも上がりやすく風穴の響の回りには大勢の人々が涼を楽しんでいる。目的の青いケシはまだ咲いているのか？と柵越しに覗くと、まだまだ咲いている。私にとって初対面の青いケシである。何とも言えない涼しげなブルー、シフォンのような薄い花びら、空気中の水分をしっかりと吸収できるように茎や葉には産毛のような毛が生えている。風穴から突如冷気が吹いてくると眼瞼が曇る。正しく天然のクーラーだ。そんな中、Hさんはケシや回りの景色を撮っている。忙しいHさんに無理を言って連れてきてもらい皆大満足な一時を過ごすことができた。風穴の涼しい風のおかげかアジサイもまだ綺麗な色を保っていた。

「上林森林公園」を後に、帰路の途中にある「和みの里」で皿ヶ峰を密越しに眺めながらのコーヒータイムを楽しみ本日の例会を終えた。（A・M）





9月例会報告 『井戸端だより 100号』に向けて

9月6日(水)10時からHさん宅に於いて活動メンバー5名での『井戸端だより 100号』について話し合いをおこなった。

話し合いの前に10月の例会で訪れる予定の上島町行きの内容を具体的に決めることに。10月10日(火)中央公民館集合 8:00出発 参加人数5名、ちょっと窮屈だが車1台で行くことになった。K・Kさんが収集してくれた資料を基に、弓削島(佐島・生名島と橋で繋がっている)と岩城島の何処を訪れるかを話し合い、時間を考えると両方へ行くのは難しいと判断し岩城島を選択。現地での行動については積善山(春の桜で有名)へ上り、岩城島の中心部へ移動し、旧島本陣(岩城郷土館)・リモーネプラザ(岩城観光センター)いわぎ海の駅などがまとまった場所にあるので、昼食を挟み自由に見学できると思うし、車中で話し合ってもよいのでは。

この後『井戸端だより 100号』についてそれぞれの考えを出し合い熟っぽく話し合い、下記のようになった。

\*もくじ一覧は81号~100号を掲載することにほぼ決定だが、頁数に応じて変更になるかもしれない。

\*愛媛県20市町の訪れた場所と活動内容を地図と共に掲載する頁の修正をおこなう。担当はS・Kさん

\*「くらしの学習会 主な活動の記録」をカテゴリー毎にまとめる。担当はA・M

担当の2人の宿題は9月19日『井戸端だより99号』印刷の日までに作成をすることになり、13時すぎお開きとなった。(A・M)



始めのころ、くらしの学習会出合い熱にも参加されたことのある元東温市会議員、現県会議員の渡部伸二さんが57歳の若さで8月31日急逝されました。ご冥福をお祈りします。  
(詳細は愛媛新聞切り抜き参照)

# 渡部伸 県議が死去 57歳



に初当選。東温市議を経て、女性県議の後継として2016年に初当選した。県議会では建設、少子高齢化、人口問題調査特別の両委員に所属。四国電力伊方原発の再稼働に反対し、教育や環境問題に取り組んだ。現職県議の死去は11年4月の野口仁民(社民、松山市・上浮穴郡邊地区)当選(68)以来。

県議会会派の環境市民の県議渡部伸二(わたなべ しんじ)氏(松山市・上浮穴郡区邊出、当選1回)が8月31日午後11時、脳卒中血のため松山市の病院で死去した。57歳。東温市出身。自宅は東温市南方。葬儀・告別式は近親者のみで行い、10月6日に旧川内町墓



## 赤い涙

その日は3月というのに雪の降りそうな寒い日でした。私の留守宅に1冊の本を抱えてNさんが待っておられました。その本は『青春の赤い夕陽—元満州愛媛報国農場第二次隊員の手記集』という、戦争という混乱の中で筆舌に尽くし難い苦難の道を歩んでこられた方々の手記集でした。私が毎年松山市主催の「松山平和資料展」に行くのを知っておられ、お話したことはありましたが「私は満州のことは何も話す気になれないの」と言われるので、そのままになっておりました。ところが心を開かれたのか貴重な本を贈呈して下さいましたのです。

「戦争ほど哀れで愚かなことはない」とつぶやいた彼女の想いと、その時代の背景（捨民政策）を記しておきたいと思います。

◎西田司（衆議院議員・元国土庁長官）の手記より（当時16歳）

太平洋戦争の末期の昭和20年の春、満蒙開拓と食料増産という国の使命を担って、われわれ愛媛報国農場隊員119人（越冬隊・先遣隊を含む）は満州（中国東北部）へ渡った。そして4ヶ月後に終戦を迎えた。暴徒に襲撃され悲惨な逃避行。飢えと寒さと病気で生死の境をさま迷った日々。1年後にようやく日本へ引き揚げたが、再び故郷の土を踏むことができなかつた方々の無念さは計り知れない。当時の苦難の体験は、我々の脳裏から消えることはない。昭和51年、代議士に初当選して間もない私は「22人の犠牲者に何らかの補償を」と微力を省みず奔走、問題を解決することができた。終戦の満州では、私も病魔におかされ、仲間の友情で一命をとりとめた。私が必死で奔走したのは、そんな過去も一因だった。その時、愛媛報国農場隊の記録をきちんと残しておかなければという思いを強くし、松山市義安寺で亡き拓友の慰霊法要を営み、その席で記録集製作を提案した。幸い全員賛同を得ることができ手記が寄せられた。特に女性の手記は骨身にしみるような内容で涙なしでは読めなかつた。各人にとっては、各々の青春の苦闘史であるが同時に全体ではこれは貴重な太平洋戦争の歴史の一頁だと思う。現在の平和日本は、戦争の悲惨な体験や犠牲の上に築かれたことを改めて想起させる。記録は子供、孫へ平和の大切さを訴えていくことと思う。

◎森本包の手記より

1月・2月は仕事が無くなるので、越冬資金作りに餅をつくことになった。満州人が馬車で運んでくる粟で、毎日、朝8時から夜9時ごろまで餅つきをした。最初は



元気だったが3日・4日と続くとくたくたになった。昭和21年の正月、ストーブで餅を焼いて食べながら、西田君のいつもの口癖が出た。「この仲間の中から衆議院に誰か出て、名をなす者が1人位は出たいのう」と。また高門君と「模擬国会をやりまます」と言って討論を交わしていた。16歳の2人はこの頃から政治に関心があったようだ。今になって思えば夢を実現させた西田君の努力の偉大さを知る。

#### ◎西野シンヨ手記より

「4月に満州に渡り10月に農作業の収穫が終われば帰国する」という先生の説明を繰り返して、短い期間だからと親を説得しました。私の家族は大陸に強い関心があったようで祖父と兄は満鉄に勤務、また次兄は満蒙開拓青少年義勇軍として渡満していました。当時の若者はいずれにせよ勤労奉仕に行かなければならない状況下にあったので先生の薦めで同じ勤労奉仕に行くのならと満州の「報国農場」行きを決意したのでした。そして昭和20年4月出発しました。そして4ヶ月後に終戦となり、日本に帰れないかもしれないと皆で泣きました。今でも壮絶だった満州からの引き揚げが忘れられません。いよいよ日本上陸の日が来ました。内地はどうなっているか、家族は無事か、不安とうれしさに胸がいっぱいでした。私は父が迎えに来ていました。家の近くの県道で父は勤務に、私は山道を登りひとり自宅にもどりました。農繁期のことで家には誰もいません。外庭にムシロを敷き、着替えが置いてありました。家にシラミを入れないための母の知恵と思い、そのまま寝転んで空を眺めていると涙がとめどなく流れてきました。近所の人のお知らせで母は弟妹を連れて転がるように帰ってきました。風呂に入り、心づくしの食事をとり、お互いの無事を喜び、家族の温かさに安らぎを覚えたのです。私は満州のことは何も話す気になれず、家族も何も聞かず、毎日寝るばかりしていました。その後も私は忘れようと努力し、誰にも満州のことは話さないことにしたのでした。数年後、近所のおばさんは「今だから言えるけど、あんたが帰った時は、この世の人とは思えなかった」と言われました。この言葉こそ、私の引き揚げ姿のすべてをよく表現していると思います。

#### ◎前田初子の手記より

現在の喜多郡内子町にあった県立女子拓殖訓練所に進んだ。「おれも行くから君も行け、北満州の大平野、荒漠千里果てもなく・・・」訓練所でみんなが声を合わせて歌った。心がはやった19歳。親の反対を振り切り1945年1月、半年間の約束で満州に渡り「愛媛報国農場」へ入った。その名の通り国に報いるために食料増産の勤労奉仕で泥にまみれた。約束の期限が近づいた8月、状況が一変した。日本の敗

戦。「もう戻れん思て、みんなで泣いたで」。大平原を夕闇が包むころ、集結していた開拓団「愛媛村」を捨てた。鉄道のある緩椽まで徒歩で72キロ。一団は略奪や婦女暴行の恐怖におびえながら南を目ざした。一番仲良しだった「松子さん」の死が忘れられない。「ちょいちょい夢を見ることあるで」。訓練所の同期、大陸の花嫁として愛媛村に入植していた。身重だった彼女は出発前の夜、打ち明けた。「わたし、あしたの朝、死んどるよ」緩椽まで歩ける体ではなかった。言葉通り、夫に毒をのませてもらい、新しい生命と共に松さんは死んだ。だんなさんが「化粧してやってくれんか」と言われたが、冷たいもんじゃけん、おしろいが伸びんし紅もつきにくかった。その感覚は、今も手に残っている。そがいなこと忘れたらええのに、今も目を閉じると記憶がよみがえる。妻、松子の遺骨を胸に、愛媛村から撫順まで(72キロ)を引率してくれた和田乗延団長も、ここで病死した。彼は僧籍を持ち師範学校卒というインテリで、若いのに人望があり温厚な人柄であった。

この長途の避難行には忘れることのできない悲しいできごとがあった。出産した赤ちゃんを母親が油紙に包んで捨てたのである。

#### ◎前田初子の証言から

開拓団のA子さんは夫が召集されて、いない。子供5人抱えての避難行だった。A子さんはみんなの迷惑を考え、同行の医者に頼みモルヒネをもらってヨーカンにはさみ、2人の子供に与えた。2人は無邪気に喜び、「おいしい、おいしい」と言いながら食べてしまうと、みるみるうちに眠って、そのまま息絶えた。和田団長は「どうも、すみません」と言って頭を下げた。A子さんは冷静に、「何をおっしゃいますか。覚悟の上です」と言って涙を見せなかったが、かわいい我が子を自らの手で命を絶つ悲しみは想像に余りある。

#### ◎ソ連兵におびえながら

緩椽についてすぐ言われたことは「女性はソ連兵に連行され暴行されるから気をつける」であった。女性隊員がまずしたことは髪を切り顔にススを塗り男子服を着てゲートルを巻き、男子に変身することだった。昼間は危なくて外に出られない。用便は夜になってから安全をたしかめてからでないといけない。しかもトイレには満州人が見張っていて近寄れない。つらい思いをして用をたした。

#### ◎西岡千里の手記から

ソ連兵に連行された女史隊員がしばらくして帰ってきた。「死のうと思つて舌を噛んだが死にきれなかった」と口のまわりは血がにじんでいた。慰めの言葉もなく抱き合つていっしょに泣いた。



◎池田初子の手記から

女史隊員がソ連兵に乱暴された後、数人の満州人が入れかわり立ちかわり乱暴を続けるさまは、まさに地獄だった。そして明日は我が身かと思うと、体のふるえがとまらなかった。経緯は男も女も暴行連行の無法に毎日おびやかされた恐怖の街であった。

※手記集には書いていませんが、後日 N さんより手紙が届きました。

以下、手紙より抜粋

私は引き揚げてから病気を繰り返し、昭和 40 年から 50 年まで入院して、約 10 年間闘病生活でした。その間一番多く思ったことは、無職の生活であり、あの時助かった命、もう一度元気になったら満州に行き、亡き友へ別れを告げて死にたいと思いつつ、50 年目にやってやっと実現し、うれしくて感激一杯で、もう何時死んでも良いと皆さんに誓って笑われましたが、これは私の本心です。旧満州の亡き友を尋ね、旅の思い出を一筆(N)

このようにひとたび戦争になれば弾が飛び交う場所だけが戦場でなく女性や子供たちにまで被害が及ぶということを肝に銘じなければならぬと思います。

◎ここまで書いた時、囲碁の友人が訪ねてきた。叔父がおまえにだけ言うが「へび、トカゲなどを取って食べてたが、それも少なくなり他に食べる物が無いので、死した戦友におびつ、その人肉を食べ生きながらえた」と苦しそうに涙ながらに話したという。又、母が長男を「お国のために頑張ってこい」と送り出した。戦死して帰ってきたが涙ひとつ流さなかった母が、ある日のことワーワー泣きながら走り出したので、後をついて行くと墓石にすがりついて泣いていた。10 歳の軍国少年の僕は「なんで泣くんぞ。非国民じゃないか」と母をなじった。教育ほど恐ろしいものはない。死ぬことを恐いと思わないのだから・・・と言った。これらの過去の歴史を正しく教えなければ再び同じ過ちを犯すことになるのではと心配している。

今にして思えば前年の 3 月 10 日すでに東京大空襲があり、今治も焼け、汽車も止まった状況の中、よく渡り渡されたものです。「捨民政策」だと非難されても仕方ないと思います。「報国の果てに命がけの悲慘な引き揚げ」、指導部の責任は重いと思います。ここに全てを述べる事はできませんが、ご判断下さい。

※『青春の赤い夕陽』は西田司（もと国土庁長官）が中心となり、皆さんの体験手記をまとめ、発行されたものです。よって西田薫さん（奥様）のお許しを得て掲載いたしました。

H29年9月吉日 S・M記



### 予測出来ない人生

「ひよっこ」朝ドラから私の一日は始まる。昭和の時代をうまく切りとって、私達老人の心をとらえて、15分間は登場人物に思いを寄せ涙したり、笑顔になったり思い出のひと時である。

茨城の農家の家族愛や、集団就職する友人愛で流れる物語だが、ある日主人公のみね子の父親が事件に巻き込まれ失踪して姿を消し、家族は悲しみに落ち込む。みね子もラジオ工場で働きながら父親を懸命に探す。ラジオ工場が閉鎖になり、父親が立ち寄っていた洋食店で働くことになり、お客を通して父親を見つける事が出来たが、父は記憶喪失で今迄歩んだ道をすべて失い、茨城の事も子供のみね子も思い出せない。みね子としばらく生活してから茨城に帰り農業の仕事をする事になった。家族全員を中心だった父親に家族は淋しい思いをしながらも暖かく接する姿に人間愛を感じた。

この話以上につらい人生を歩んだ方もおられると思う。

私も昭和9年生まれなので、戦中戦後の物不足の時代を生き、20歳に社会に出て独り立ちするが、親に反対される中で22歳で結婚し小さな住宅でも何とか幸せな家庭生活を10年過ごした時、予測しないことが起こった。

娘が3歳、私が33歳の時、夫の母親が72歳で右半身不随の病に罹り、松山から田舎に連れて帰った。昭和40年代は、老人ホームも介護支援もない中、私は仕事と子育てと姑の世話に明け暮れる毎日となった。

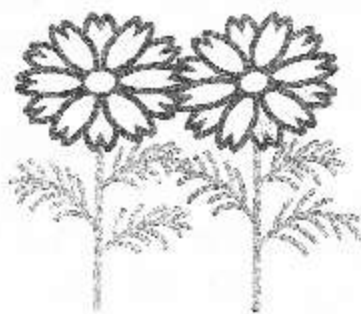
姑は自立心の強い人で、迷惑を掛けては、と左手で食事も読み書きも練習し、朝夕の食事の世話と土日の身の回りの世話で何とか24年間の年月を過ごし、96歳で天国に召されたが、クリスチャンだったので感謝の言葉で、私の方がきつい言葉を吐くこともあり、今も心が痛い思い出となっている。

姑が90歳になった時、体が弱り転ぶ様になったので、私が退職して家で家事をして過ごす様にした。私の心も落ち着き、今迄の足りなかった点も手が届く様になり、思い出話も聞いて、夫の成長のあれこれや、明治大正昭和を生き抜いた苦しかった生活の数々に、頭が下がる思いだった。

人生、誰にも予測出来ない辛い事に出合うが、マイナス面ばかり考えると、しんどい事ばかりに思えるが、私の今を考えると、姑の生き方や老人の老いていく姿など、経験した者にしか分からない数々の事が身に付いたと思う。

水川きよしの歌の中に、泥の中で育った遠の花の美しさを歌った詩を聞いた時、ふと人間も同じだと思った。苦勞を知らず楽に過ごした人間よりも、昭和の時代を生きた人間の方が、他人を思いやり弱い人に寄り添う優しい人が育った様に思う。今を生きる孫達の様子を見てみると、もう少しきつい事も我慢する子供に育って欲しいと思う。

(Sa・K)





## 娘と孫

8月に3歳になったばかりの初孫が、幼稚園に通いだしました。それを聞いて、私は不安に思ったのですが、娘と孫は、2歳になった頃から、その幼稚園に何時でも遊びに行ける場所があり、よく通っていて、担当の先生とは、顔見知りになっていたそうです。

孫は幼稚園に行けるのをとても楽しみにしていました。娘も、幼稚園用のスマックを作ったりその他の入園準備をしたりして親子で楽しむ様子を、LINEで見せてくれていました。スマックには、孫が、今夢中になっているキャラクターがプリントしてありました。前にも後ろにもそのキャラクターがいっぱい付いたスマックを着て、入園ポーズをとる孫の表情がなんとも愛らしくて、夫と二人、LINE動画をしながら会話も弾みました。もう少し近い距離に娘夫婦が住んでいたら、お互いの顔が見られる回数をもっと多いと思うのですが、現実には2ヶ月位は会えないので、LINEでの会話が私たちと娘家族を結びつけてくれています。

9月1日は、入園日でした。途中入園だからなのか、入園式に親子で参加するというような行事はなかったそうですが、孫の話によると、6人の入園者が有り、2歳児から通っているお友達と合わせて8人のクラスで、先生が2人いるようです。最初の日、園長先生から、神様のお話を聞いたそうです。キリスト教系の幼稚園ですから、神様のお話もあるのでしょう。孫の話は、内容不明の部分もあったようですが、神様という言葉は初めて聞いた孫にとっての神様はどういうものだったのかと不思議な気持ちになりました。初めて聞く言葉との出会いは様々です。無宗教の私たち家族ですが、なんだか神様という言葉に新鮮な印象を受けました。孫が神様に守られて大きくなっていけるように願いました。娘は、キリスト教系の学校に通った経験がありませんが、時々、孫から神様のお話を聞かされるでしょう。

二日目。孫は、幼稚園に着くと、すぐに、みんなの輪の中に入り、11時にお迎えに行くと、「まだ帰らない。もうちょっと遊ぶ」と言い、娘も時間に余裕があるので、孫が帰るといふまで待っていたようです。帰りの車の中での孫の話で、友達とぶつかったこと、ピーマンは食べられないと先生に言ったこと、お外で遊んだことなど、はっきりとはわからない部分もありますが、とても楽しかったということは汲み取れたようです。反面、娘の方は、毎日の生活から数時間でも子供を手放す不安感があるように思います。子供最優先の暮らしぶりに、彼女の奮闘ぶりを褒めてあげたいと常日頃から感じていますが、最初の親離れ子離れに、寂しさを感じている娘が、

私には気になっています。

私自身のことを振り返ると、やっと 幼稚園に行かせられるという気持ちの方が強くて、今になって、子供との関わり方については、反省しています。仕事があるという言い訳を若かった私は盾に、忙しい生活を子供たちにも強いていたように思います。振り返ってみれば、子育ての時期は本当に短くて、もっと 遊んでやれば良かったとか、もっと、子供の気持ちに寄り添った生活ができていたらよかったのに・・・とか、なんと雑な子育てだったのかと反省しきりです。心が育つ時期に、我が子が何を考え、どうしたいのか、それをどれだけ理解していたのか、或いは、どう理解しようとしたのか、母親としては、失格だったと思います。今、後悔が溢れています。

係の通園、一週間。朝になると、幼稚園に行かなきゃあとと言って、名札を胸につけてというそうです。先生に、「おはよう～ございます」と大きな声で挨拶ができています。娘は、今、仕事をしていないということもあり、目線が、いつも我が子にあります。いつか、社会に復帰する時期が来ると思いますが、今の生活をエンジョイして欲しいと願っています。娘の子育てや孫の成長を、遠くからでも見守れる LINE に、本当に感謝しています。

(M・T)



## 猫を飼う

松山市の山里に暮らして8年あまり。森と生きものに囲まれて、バタバタと暮らしています。引っ越してきた頃には幼稚園児だった長男も中学2年生、お腹の中にいた次男は小学2年生になりました。

どこへ行くにもくねくねの道を運転せねばならず、地デジは映らず、ファミリーサポートは引き受ける人がいないと断られ、不便この上ないと感じながらも、澄んだ空気、さまざまな野生生物との出会い、薪ストーブのための薪割りなどを楽しんだ8年間でした。2人の息子は車がほとんど通らない野外を駆け回り、大声で叫び、歌い、虫かごいっぱい虫を捕り、地面に大きな穴を掘り、焚き火をして過ごしてきました。

ただ一つ、予想していなかったことは猫を飼うことでした。幼い頃から猫好きでしたけれども、世話好きではないので、生き物を飼うことは避けてきました。ところが、引っ越してみると家の周りには猫が何匹も暮らしていて、夫や息子たちがうれしげに餌をやり始めたではありませんか。これは困ったと思いつつ、外ならいいかと静観していたところ、あれよあれよという間に猫は増え、三毛猫が捨てられていたのがきっかけで家の中でも猫を飼い始めるようになりました。この頃は少し減って、現在、家の中に5匹、外に1匹です。今でも飼うのは嫌なのですが、2ついいことがあると感じています。

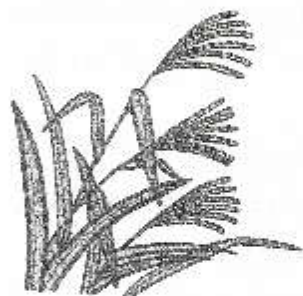
1つは、非言語のコミュニケーションの場があるということです。猫とうまくやっていくために、鳴き方や姿勢、表情、しぐさなどで猫の気持ちを想像したり、行動を予想したりしなければなりません。観察力、想像力を駆使して相手の気持ちを理解し、こちらの気持ちを相手に伝える方法を考えます。言葉は通じませんから、あれこれ試します。試しているうちにだんだんわかってくる、わかってもらえることもある、その経験が子どもにはとてもいいと感じています。



もう1つは、自然がわかるということです。自然は思うようにはなりません。猫が困った事態を引き起こしても、猫は悪くありません。猫は猫らしく行動しただけなのです。思うようにならない猫にイライラしたり、怒ったりするうちに、猫を受け入れるには自分の行動や気持ちを変えるしかないと気づきます。そして自分が変わったら、猫の態度も変わり、手応えを感じることでしょう。

そして、猫はいつか死んでゆきます。そのときもまた学びの時です。命あるものは必ず死にます。大自然に囲まれた暮らしの中での生きものの死は、おそらくそう理不尽なこととは感じられず、自然の法則の1つとして息子たちの心に残るのではないかと考えています。

(T・S)



## 京野菜のつれづれ

大阪には浪速野菜、奈良には大和野菜、他に全国各地に伝統野菜があり、その郷土料理があろう。さて、京の伝統野菜と言えは僅に十指に余る。その中で、私方の貧しい食の中から思いつくものを幾つか記します。

先ずは大根。『古事記』に「打ちし大根 根白の白腕 枕かずけばこそ」と。

女性の白い腕、柔肌の形容となる。また大根は薬でもある。「土大根万にいみじき薬とて、朝ごとに二つ焼きて」と『徒然草』にもその功德が綴られる。何と言っても有名なのは師走。千本釈迦堂での大根焚である。これには聖護院大根が使われる。丸々として甘く苦味はない。おでんにはこれ。

次は蕪。何と言っても聖護院蕪の千枚漬。京つけものの代表格であり、お歳暮としてもはやされる。かつて大寺聖護院のある地で発祥したものであるが、今や栽培地は西へ。今では丹波の地へと移った。黒豆・小豆と言った特産品を生み出している風土である。この地の白い霧が、又美味しい蕪を育てる。お一人暮らしの方には、この千枚漬と京都の誇る酸茎をスマートレターでもう何十と送ったことか。酸茎については、又の機会に書かせて頂きたいと思っている。

葱では九条葱が京では王座。その昔弘法大師が洛南それも九条にある東寺（帝より帰朝した若き空海が賜った教王護国寺）の近くで大蛇に出くわし、傍らの葱畑にひそみ、難をのがれたとも。丈の高い異種の種であったのだろう。

この葱には あんこ があると言う。寒さが厳しくなると葉の空洞にヌルヌルした透明な糖状の物質が増え、旨味甘味を増す。葱の入った料理には、「九条ネギ入り」と記し、付加価値をつける。あるホテルでは九条ネギ入りバゲットが並べられていた。

茄子。秋ナスは殊に美味しい。少し高価であるが賀茂茄子は是非話題としたい。まん丸の電球形である。輪切りにして田楽や油炒め。秋生育のものは栄養価が高く旨さも増す。上賀茂の農家の人は、当地の茄子と酸茎菜に殊更の誇りを持つ。

京野菜として認定はされていないが、きごしょう又は、きのしよと仮名書で、この時期店頭に出廻るものがある。どの漢字を当てはめればいいのか未だ不明。木胡椒か？ 何のことはない薬唐辛子である。唐辛子の旬7月を過ぎ、実を採った根株を引き抜き、いまだ青い枝葉を束ねて売りに。かつて生協で野菜の王様として佃煮が瓶詰で高く、これであったかと解る。ひと湯掻きし、ちりめんじゃこやごまを混ぜ

油炒めする。一般に廃棄処分のもものが、貴重な食材であった訳である。

あるフランス料理店で目にしたポスターにはいささか驚いた。ベルサイユの庭で栽培した京野菜を、パリでフレンチにして食するというもの。いかようにでもなさるがよろしいが、京の特産地のものを、昔ながらにおばんざいとして普段着で戴くのが、京の地野菜たちへの礼ではないかと思う。堀川牛蒡、鹿ヶ谷南瓜、壬生菜、海老芋・筍と賑やかなこと！

(M・D)





## 行って見た台湾

前から一度行ってみたいと思っていた台湾に行ってみた。今回も学会に参加した後少し回る程度だったが、退職した夫も一緒に、二人でそれなりに台湾を満喫できた。

8月3日午後1時過ぎに関空を出発して3時間弱の飛行時間で台湾桃園飛行場に降り立った(時差1時間、現地時間3時過ぎ着)。昨年飛行場から台北までのMRT(大量高速輸送 地下鉄のようなもの)が開通したと聞いていたので、それに乗ってみることにした。紫色のきれいな車両だった。160台湾元(日本円で640円)で切符ではなく紫色のプラスチックコインを買って、それを自動改札機の専用場所に当てて通過するのだ。初めて体験する方式だ。ICカード方式も併用しているので、プリペイドカードを買えば、どの国も変わらないことになる。途中の駅で多くの人が別の電車(おそらく快速)に乗り換えたが、私たちはそのまま台北まで行った。それでも50分はかからなかった。

台北駅に着き、今度は学会のある淡水行きのMRTに乗り換えた。淡水線の方は古いかから50元だった。こちらは大勢の人が普通に利用する庶民の足のようで、人の乗り降りが激しい。日本のシルバーシートのような席がいくつかあるが、お年寄りが乗ってくると、必ず誰かが席を立てて譲っていた。子供のころからの教育が行き届いているのか、感心した。40分ほどで淡水駅に着いた。学会が斡旋するホテルは歩いて5分だった。なかなか立派な福格ホテルというところだったが、学会価格の半額で泊まれたのはありがたかった。

4日と5日、私は朝から学会だったので、会場の淡江大学に缶詰。うらやましいことにその間夫は彼の興味のまま、マングローブの密生地の見学、旧市街、1600年代にスペイン人が建城、その後オランダ人によって改修された紅毛城など見学し、4日の夜の懇親会だけ学会行事に参加した。いいところ取りの関わりだったが、色々歩き回るには暑すぎたらしい。大量の水と塩飴が欠かせなかったそうだ。桶屋さんや日本製品だけを売っている店を見つけたり、看板や表示に日本語を見つけたりすることも多かったということだ。

学会後、学会が企画する淡水一日ツアーに申し込んでいたので、同じホテルに4泊することになっていたが、直前に旅行社に直接問い合わせたところ、そのツアーは最低遊行人数に達しておらず、なくなったということ。急遽ホテルを2泊キャンセルして、最後の立食パーティーには出ないで、台北に移動した。キャンセル料がと

られなくて、ほっとした。

新たにとった台北のホテルは街の真ん中にあった。フロントの人に、近くの新生三越デパート地下にある店（鼎泰豊）の小籠包がおいしくて人気だと聞いたので、出かけた。1時間待ちだったが、正解だった。

6日は朝早くから出かけ、歩いて北門まで行ってみた。日本が建てた郵便局など周りには日本統治時代の建物が多く残っていて今も使われている。どれも立派なものだった。その後もずっと歩いて、赤レンガ造りの総督府（日本統治時代の建物）を外から見て、近くのMRTの駅で2日パス（パス・MRT乗り放題）のICカード（310元）を買い、そのあとは大いに公共交通機関を利用することになる。まず、孫文の国父記念館（無料）へ行く。

孫文は中国でも尊重されているが、ここ台湾でも極めて大切な存在として扱われていることがうかがえる。思いがけず、正時に行われる衛兵交代式を見ることができた。衛兵がまるでロボットのように面白かった。次に行ったのが蒋介石の中正記念堂で、ここでも全く同じやり方の衛兵交代式を見ることがになる。

それから、MRTで西門に出て、バスに乗り、台北での一番の目的故宮博物院へ行く。中国北京の故宮へ行ったとき、その広さと素晴らしさに圧倒されたが、貴重なお宝は蒋介石によってすべて台湾にもっていかれたと聞いた。それで、台湾のお宝もぜひ見てみたいと思っていた。ここでは入場は3000人に制限されていた。パスポートを預け日本語音声ガイド（有料）を借りることにした。

有名な翠玉白菜（清廉潔白の象徴白菜と子孫繁栄の象徴キリギリスを彫り上げたもの）を見ることができた。19cmほどあって、思っていたより大きかった。確かに陶磁器、青銅器、書画など価値のあると思われるものが数多く見受けられたが、本家本元の故宮の建物と一体化した圧倒感はここでは感じられなかった。ここの売店で白菜関連のお土産を色々買う。

帰りはホテルの近くの駅までバスに乗った。その晩は、ホテルの近くでいつも行列ができて気になっていた餃子の店に行ってみた。相当待たされたが、本当においしかった。近くのコンビニで台湾ビールと朝食用に食料を調達する（セブンイレブン、ファミリーマートなどコンビニはいたるところにある）。

7日は朝早くホテルを出て、陽明山の方へ行ってみることにした。MRTで北投へ、そこからバスで陽明山方面へ。バスはミニバスで、山のくねくね道を立って過すのは、なかなかスリルがあった。途中地熱利用している場所を通って竹子湖まで行ってみた。花の栽培や鶏の放牧をしているところがたくさんあったが、湖がどこに



あるのかわからなかった。陽明山公園は、花の季節でもなく、期待外れなチョイスだった。結局また MRT の駅から台北に戻り、動物園方面へ。持っているパスで猫空ロープウェイに乗れると思い行ってみたのだが、何と1日パスでは乗れるが2日パスでは乗れないとのこと。ロープウェイは160元もするというので、ほかからしくてホテルに戻った。実は学会ツアーがあると思っていたので、台北のホテル予約は7日だけだったが、結局ツアーが成立しなかったので、5日夜から台北に移動して色々回ることができた。それで7日夜には台中に移動して夫の一番の希望阿里山へいくことにした。そのため7日に予約していた台中のホテルには泊まらないことになったが、キャンセルしてもお金は戻ってこないなので、できるだけ活用するため、ホテルに戻ってシャワーなど浴びて少し休憩した後、ホテルの送迎バスを利用して高铁（新幹線）の台北駅まで送ってもらった。台湾の新幹線は台北から台中まで50分、675元だった。車両の雰囲気など日本の新幹線と似ていて、親近感がわいたが、連結部の扉は手を触れたら開く。近づいただけで開く日本のよりいいと思っただ。面白いことに使用後の切符は手元に残すことができた。

急遽とったホテルは高铁台中駅からは離れていた。高铁台中駅の近くに台鉄烏日駅があり、そこから台鉄豊原駅まで行く。ホテルは駅の前だった。晩ご飯はホテルで初めて豪華なコース料理を食べたが、台湾料理というより広東料理だった。

次の朝は、阿里山行きのツアーで、台鉄台中駅7時半集合だったので、6時半から始まったホテルの朝食もそこそこに、荷物をすべて持って集合場所まで行く。台鉄台中駅は東京駅を設計したあの有名な辰野金吾の設計だという。台湾の人がそれを誇りに思っていることがなんだかうれしい。

ツアーのガイドは日本語が堪能なシェウさん、私の出身地名古屋に仕事で8年いたとのことで、とても親しみがわいた。他のツアーのメンバーは、香港からの4人家族と年の差新婚？カップル（妻の方が年上）だったので、シェウさんは日本語と広東語で説明してくれた。

阿里山は台湾の最高峰玉山（3952m）に連なる山塊の総称で、一説によると世界で一番おいしいという高山烏龍茶の産地でも有名だ。私たちの乗ったマイクロバスは茶摘み風景を見たりしながら、登って行った。ツアーのマイクロバスは阿里山の入り口まで。ここで公営の電気バスに乗り換え、着いたところは阿里山の最高級ホテル阿里山賓館。日本統治時代に台湾総督も宿泊したという老舗ホテルで、優美な檜造りの歴史館と新しい現代館からなるホテルだった。着いたのが11時過ぎで、まず歴史館の見学、屋上の景色や庭の樹木などを見た後、昼食をとって、阿里山森林遊



楽区を散策する。象に似た木（象鼻木）を見たり、三代木を見たりする。派手なお寺慈雲寺を見た後、海拔 2190m に位置する小学校、阿里山博物館の前を通り、巨木群棧道を歩く。樹齢 2300 年と推定される香林神木（台湾檜）を間近で見て、その大きさに圧倒される。また、かつて伐採した巨木など樹木の霊を弔うための樹霊塔を、興味をもって見る。巨木があるたびに写真を撮りながら歩いて、森林鉄道の神木駅まで行く。気温は 19℃だった。暑い台湾でここは別世界だった。ここから森林鉄道で阿里山駅まで行く。随分立派な森林鉄道の車両だった。内装が大きな桜の花びらのデザインだったのには驚いた。林業が盛んだった昔が偲ばれる。

帰りはお茶が試飲できる店に寄った。お茶の入れ方を間近に見ることができて面白かった。烏龍茶も紅茶も大変おいしかった。シュウさんがこのあたりの女性は台湾で一番きれいだと言っていたが、それは高山に住む少数民族の血が混じっている人が多いからとのことで、お茶を入れてくれた女性もそんな一人のようだった。専用の茶器で専用の木製の板（初めのお茶を捨てて流すためのもの）の上で淹れてくれた。少数民族が住む山岳地が山崩れしたとき、台湾政府は手厚く住宅を提供して住ませたそうだ。山の麓にある住宅はとても広くて立派なものだったのでびっくりした。日本の被災者の住居と思わず比較してしまった。もちろん少数民族の保護という政治的意図もあるのだが。

高铁台中駅まで送ってもらい、桃園駅まで行き、桃園のホテルに泊まる。飛行場ができて新しく開発した地域ではなく、桃園の旧市街のホテルで、雑然とした中にあったが、部屋は広々としたなかなかいいホテルだった。フロントの女性がとてもてきぱきと感じがよく、次の日朝 8 時半の飛行機で帰国するため、ホテルを 6 時に出なければならないことを告げると、朝食をサンドイッチにして準備しておくと言ってくれた。翌朝は桃園飛行場まで黒塗りの高級車（無料）で送ってくれた。

こうして今回の台湾旅行は終わりを告げた。民意の高い、進んだ台湾を見る旅だった。日本統治時代があるにも拘らず、台湾の人の親日的な面を大いに感じる旅でもあった。もし機会があったらまた行って見て、台南の人口第一の高雄の方にも足をのびたいと思った。今回全くの個人旅行だったので、効率の悪いこともあったが、気の向くまま移動することができた。それはシステムも整い、さらにほぼ日本語だけで過ごせるところだからできたことかもしれない。(T・H)



## 雑感

異常なお天気が続いています。

台風は迷走し、連日、記録的な大雨のニュースが各地から伝えられています。

綾町は、とにかく暑い夏でした。

9月に入り少し涼しい日々にホッとしたのも束の間、再び真夏のような暑さです。

白露の候を迎えた朝は土砂降りでした。初候の“草露白”には程遠い風情の無い朝だと思いました。でも、この時期は大気が不安定になりやすく、長雨をもたらす時期でもあるようです。確かに、近くの川辺ではセキレイの幼鳥が日々成長し、次候の“鶺鴒鳴”も近いことを感じます。ここ宮崎では末候の“玄鳥去”とはならず、冬もツバメたちは忙しく飛び交い南には渡りません。7年前、冬にツバメを見たときは吃驚しました。

二十四節気七十二候を味わう時、昔の人が如何に季節の移ろいとともに、大切に生活してきたかを感じます。

遂に大五郎は立ち上がることが愈々困難になり、オムツ着用になりました。

ストレスで排泄が困難になることを心配しましたが、自分の状態を彼なりに認め、受け入れてくれました。

オムツ交換の際、股関節を強制的に動かすことがリハビリになったのか、少しの間なら歩くことができるようになっていました。それは必ず夜でした。居間で横たわっている大五郎は、夜、私が寝室に引き上げると、今まで通り寝室について行かねば、と思ったようです。よろけながら、何とか寝室にたどり着いたのでしょう。朝、居間では様々なものが移動し、ひっくり返っていました。それは、大五郎が歩いた証であり、私たちにとっての喜びでした。

ある夜、あまりに眠たかった私は、寝ていた大五郎に声をかけるのを忘れて、その日の最後の寝返りをうたせ、オムツ交換を始めようとしていました。突然大五郎が牙をむき鼻に皺を寄せて低く唸りながら私の手首をくわえました。咬まれると思いました。大五郎は子供の頃から後ろ脚や尻尾を触られるのが嫌いでした。その時、既に寝室で眠っていた筈の杏がとんできて私と大五郎の間に割って入り、優しく、優しく大五郎の頬を舐め始めました。1分位だったのか、数分続いたのか。大五郎は落ち着き、杏は傍らに横たわりました。それ以降、大五郎の体位変換やオムツ交換の時には、どこにいても杏は近くにやってくるようになりました。

現在、大五郎は全く立ち上がれなくなり、頭を擡げるのが精一杯です。それでも



何とか動きたいのでしょう。横たわったまま、腰を中心にぐるぐる回転します。やせてしまった腰骨あたりの毛が鱗り切れ赤くなった皮膚が見えています。体位変換と粉薬の噴霧は欠かせません。体位変換しながらの敷物交換、寝床の上での部分清拭など、15年前に亡くなった両親を介護した時お世話になった在宅医療・介護の方達から教えて頂いたことが大変役に立っています。今なお続く両親からの贈り物です。

今まで午前7時頃に始まっていた私の一日は大五郎の目覚めに合わせて6時には始まることが多くなりました。

すべてが段取り良く進んだ日には8時頃から1時間位、近くの綾南川にかかる橋の近くに出かけることができます。猛暑日が続いた今年の夏でしたが川面を渡り木々の間を抜けてくる風の心地よさは言葉では言い尽くせません。ある時は霧が流れ、ある時は朝陽を受けてキラキラと輝き、時折魚が水飛沫を上げて眺ねます。そんな魚を狙って川岸のあちこちでアオサギや白いサギが待ち構えています。雨の後、水量が増し堰を超えて水が流れる時、堰を上る魚を狙うアオサギは抜き足差しで眼差しは真剣そのものです。アオサギは漁の名人です。魚をくわえて自慢げに首を精一杯伸ばして辺りを見回します。傍の緩やかな流れではカワガラスが何度も何度も水に潜って食欲を満たしています。セグロセキレイやハクセキレイの幼鳥たちは2羽、3羽連れ立ってじゃれ合いながら走り回り、飛び立って枝にとまろうとして失敗し慌てている姿は何とも可愛いく、思わず笑ってしまいます。

春先の巣作りからずっとワクワクしながら見ていたヤマセミのカップルは梅雨の長雨の頃も毎日の様に交代で巣に出入りしていましたが7月に入るとぱったりと姿を見せなくなりました。暑くなったこの時期、8時過ぎでは遅すぎるのかもしれませんが、是非とも幼鳥たちに逢いたいと、巣穴の近くを注意深く双眼鏡で探しましたが、来る日も来る日もヤマセミの姿を見ることは出来ませんでした。

川の周りは水遊びやバーベキューを楽しむ子供や若者、家族連れで賑わう季節にもなりました。

7月も終わりに近づいたある日、堰の辺りは早朝から川遊びの歓声が上がっていました。鳥たちとの出会いを半ば諦め、何気なく橋の真下を覗き込んだ時です。早春の頃、カワセミがお気に入りだった石の上に2羽のカワセミがいます。羽は見慣れた輝く青緑色ではなく、くすんでいます。脚もオレンジ色ではなく黒に近い色をしています。幼鳥です。カメラを向けてもじっと上空を見上げたまま動きません。



程無く親鳥が戻ってくると大騒ぎです。草陰からも別の幼鳥が現れ、ひとしきり餌をねだった後、6羽の家族は飛び去りました。夢のような時間でした。その後も行く度に親子の触れ合いを楽しむことができました。幼鳥たちは次々に自立していきました。最後の1羽は親をしのぐほど大きくなっていましたが甘えん坊の臆病さんで、なかなか1歩が踏み出せません。石の上で、消波ブロックの上で、厳しく気長な、父親と母親交代の指導が続きました。消波ブロックの端で幾度となく促しても後退りするばかりです。親鳥が嘴で頭を突くこともありました。そんなある日、幼鳥を残して、親鳥が姿を消しました。幼鳥の周りにはたくさんの魚が泳いでいるのが橋の上からも見えます。30分位経ったでしょうか。意を決した幼鳥が舞い上がり、水中に飛び込みました。魚をくわえています。嬉しくて、嬉しくてたまらない様子です。魚をくわえて空を仰ぎ見た後、何度も、何度も魚を石に叩きつけ、弱った魚を暫く石の上に置いて戦利品を満足そうに眺めていました。最後の1羽も自立しました。

8月に入り、ゴイサギだけでなくササゴイ、カワガラスの幼鳥も姿を現すようになりましたが、ヤマセミには逢えません。

河原ではハグロトンボやサナエトンボに交じってコムラサキに出逢う機会が増えました。コムラサキはクスギの幹で樹液に夢中です。

自宅前の水路には補修工事後姿を消していた魚が復活し、ベニトンボも姿を現すようになりました。本来ベニトンボは台湾あたりに生息する南のトンボだそうです。このところの温暖化の影響での動植物の北上傾向に伴い宮崎でも普通に見ることができるようになったのではないかとのことです。

8月15日夕方、ヤマセミが特徴ある鳴き声とともに巣穴近くのいつもの枝にいつものポーズでとまり、あっという間に飛び去りました。一瞬のことでしたが目が合ったような気がしました。いつも私がヤマセミの事を気にかけていることを知っている近所の方が、近くの温泉施設の敷地内の池にヤマセミがやってくることも教えてくれました。元気でいてくれたことにホッとしました。9月に入り、川の周りも静けさを取り戻しています。その内、戻って来てくれることを期待しています。

ナツフジ、ヤブミョウガ、アオツヅラフジ、オニドコロの花が終わり夫々に実を結び、ノシランの白い花が薄暗い小径の縁を飾り、クサギ、ポタンヅル、クス、サネカズラの花が咲き始め、庭にミヤマアカネが初めてやってきました。

川辺では若いキセキレイをよく見かけるようになり、イソシギの幼鳥も姿を現しています。

橋から川下に目をやると、夏の間はどこに行っていたのでしょうか。カワウやカルガモも姿を現しています。クサシギやキアシシギもいます。

公園の桜や川沿いのハゼノキの葉が秋の衣装に着替え始めました。

徒歩数分圏内に川が有り深い森に繋がっている幸せを満喫しています。

メガソーラー建設のために大規模な森林伐採が行われているといいますが、大規模に森林を伐採する際には環境影響評価法の規制が有りますが、再生可能エネルギーを産み出すメガソーラー建設はその規制の外に置かれているのだそうです。再生可能エネルギー生産という大義名分のもとに何の法的制約もないのです。おかしいと思います。森が無くなれば生物の多様性が失われるのは勿論、二酸化炭素吸収能力が低下し、保水力の大きな森の土壌による水害緩和や水の浄化も低下し、海もやせます。電力供給のために地球そのものを壊すのは本末転倒です。高齢化などで現在放置され荒れている森を元気な元の森に回復させることを考えるべき時なのに、です。

フランス、そしてイギリスでは2040年までにガソリン及びディーゼル車の販売を禁止するそうです。確かに車からの排気ガスは無くなるでしょうけれど、電気は無尽蔵に存在するものではありません。如何に賄うというのでしょうか。電気自動車の普及の前に、基本的に歩いて生活できる環境を望みます。

近年ますます大きくなる自然災害は地球温暖化に因るところが大きいとよく言われます。そのため、クリーンエネルギー供給が必要であることは十分に理解します。しかし、使いたいだけのエネルギーを欲しいだけ何とか産み出そうという発想からはそろそろ卒業する時ではないかと感じます。

殺人蟻と恐れられるヒアリが日本に上陸したと戦々恐々としていますが、人も物も世界中を往來する現在、いつかは入ってきたでしょうし、完全に封じ込めるのは無理なように思えます。しかし、物流や渡航を制限しようとの意見は聞かれません。最も効果的な方法だと思うのですが、現実的ではないのでしょうか。

私たちが快適に過ごすために、環境に大きな負荷を与え、その負荷が私たちにより大きな負荷を与える、悪循環が続いています。おまけに、電力供給が止まると殆どすべての機能が喪失する現代社会はあまりにも脆弱です。人智を尽くしても制御しきれない自然が有り、自然は人間の想定をはるかに超えています。

懐かしいテキサス州を大型ハリケーンが襲い、大都市ヒューストンに甚大な被害を与えています。一日も早く、あの明るくおおらかな日々が戻ります様に！(K・O)



## お知らせ

### ・10 例会のお知らせ

10月10日(火)午前8時 中央公民館集合  
県内で唯一まだ行ったことのない上島町を目指します。今回は岩城島に行くことになりました。

### ・11 月例会予告

11月1日(水) 徳島県 大塚国際美術館に行きます。レンタカー(ミニボックス)を借りる予定ですので、運転手を除き7名乗れます。参加ご希望の方は10月25日までに林までご連絡ください。

・今年末に井戸端だより100号記念号を発行する予定です。

くらしの学習会では、現在、次に発行する100号記念号について検討中です。

これまで25年間活動を続けてきたこととなりますが、今や会員も高齢化し、これまでのように季刊号としてこの『井戸端だより』を定期的に発行するのは難しくなりました。

そこで、記念の100号を最後に定期発行を終了いたします。長きにわたりご愛読ありがとうございました。

来年以降は時期を定めず、原稿が集まったとき、不定期に気が向くまま発行することになると思いますので、かなり性格の異なるものになると思います。つきましては、そのようなものでも、続けて読みたいと思われる方はお手数ですがご連絡ください。ご連絡いただいたご希望の方にはのみお送りすることにいたします。以上、ご報告およびお願いまで。

連絡先 TEL/FAX 089-964-6936(林)

E-mail: [kt-hayashi@nifty.com](mailto:kt-hayashi@nifty.com)

## 編集後記

去年の今日生まれた孫が満1歳になりました。離れて住んでいるので、行事があれば会いに行っていますが、今回掲載の文にもあるように、LINE という便利なツールのおかげで、離れていても動画で孫の成長が手に取るようにわかりますし、テレビ電話で孫に顔を忘れずにいってもらえます。本当にありがたいことです。先日、ちょっと早めの1歳の誕生祝いに出かけましたが、相手をしてやると様々なことを吸収する時期なのでおもしろいです。きな臭い状況の中、孫たちが将来ずっと幸せであるよう、平和を祈らずにはいられません。(T・H)